未病漢方事始め
—第21回—

がんに対する攻めと守りの漢方

修琴堂大塚医院　渡辺 賢治

しばらく医学の難しい文が続いたので、少し閑話休題的に、読み物として書かせていただきます。今回取り上げるのはがんの漢方治療です。

漢方を最後の砦と考えるのは誤り

筆者が院長を務める大塚医院は、昔ながらの煎じ薬で行う漢方医院ですので、難しい病気の方が、最後の砦として来院されることも多く、がんもそのうちの1つです。

がんが進行すると「悪液質」となり、栄養不良の状態で、全身がむくんできます。栄養状態を改善するためには、良質のたんぱく質を摂取する必要がありますが、そのような状態では食欲もなく、体重も落ちる一方です。こんな時は、漢方治療で食欲を回復するように最善の努力をしますが、追いつかないこともしばしばです。西洋医学の治療を受けて、それでもどうにもならない時に、漢方もあるのではないか、という希望で受診されるのですが、残念ながら漢方は、そのような状態において、起死回生の魔法の薬とはいきません。では、漢方を上手に活用するにはどのようにすればいいでしょうか?

免疫を上げるのが漢方の働き

がんが発見されるのは、直径が1cm以上の場合がほとんどです。直径1cmだとがん細胞の数は10億個に達しています。がん細胞は発見されるよりもずっと前からからだの中にいて、長い時間かけて増殖を続けていました。その過程において、からだの中ではがんとの闘いが繰り広げられていたのです。免疫が強ければやっつけることもできるがん細胞ですが、仕事が忙しくてストレスが多い生活をしていると、免疫が弱ります。がん細胞は、そうした隙をついて増えるのです。私は免疫の研究をしていたので、漢方薬が免疫を高めることは分かっていました。では、免疫だけでがんはやっつけられるでしょうか?

私自身、長年この疑問を持ち続けていました。患者さんには「漢方だけでがんは治りません。西洋医学と併用した時に最大限の力を発揮します」と言っています。しかしながら、小さな腺癌や悪性リンパ腫などが、漢方だけで消えてしまった例を、何度も経験していることも事実です。

免疫を上げれば本当にがんは消えるのか、という疑問に答えてくれたのがオプジーボという薬です。オプジーボは抗がん剤ではなく、がん細胞が獲得した、免疫の攻撃を受けない仕組みを取り除いて、免疫ががんを攻撃できるようにする薬です。これで進行したがんが消えることもあります。ただし全員ではなく、効く人・効かない人がいます。

オプジーボが世に出た時に、漢方だけでがんが消えてしまう人も存在し得る、ということを得心しました。しかしながら、その効果は確実ではありません。患者さんの免疫状態、体力・栄養などの条件が揃った時に、漢方がよく効くのだと解釈しています。

抗がん剤治療や手術が嫌なので、漢方だけでどうにかしてくれ、という患者さんもいます。しかし漢方を最大限活用するためには、がんを直接やっつける手術や抗がん剤と併用するのが最善です。肺腺癌の患者さんが、「俺はもう75歳だから手術などしないで寿命を全うする」と仰られたのですが、「手術で完全に取り除いて、再発予防を漢方でやりましょう」と説得して手術をしてもらいました。手術は大成功で、その後再発もなく、もう数年経ちます。今でも「手術が嫌で漢方の医者に行ったら、漢方の医者に手術を薦められた」と軽妙にお話されます。75歳でいらした時は、十分に生きたと仰られていたのが、今では100歳まで生きたい、と話されています。

攻めの漢方、守りの漢方

このように免疫を上げるのが漢方治療の真髄なのですが、いつも理想の治療ができるわけではありません。がんの漢方治療を大きく分けると「攻めの漢方」と「守りの漢方」に分けられます。患者さんが、がんと闘う力を十分に有していれば攻めの漢方を行います。漢方の診察に加えて、栄養状態、体温、リンパ球の数などで総合的に判断します。リンパ球の数は白血球数×リンパ球の割合（%）で計算します。攻めるための漢方薬は補中益気湯をベースにして免疫を高める生薬を加えていきます。

一方、食欲不振や下痢などによって免疫を落とす状態があれば、体を守る漢方薬で、免疫を阻害する要因を除去することを試みます。食欲を増すために四君子湯、下痢を止めるために附子理中湯、などを使って全身状態を改善しながら、段階的に攻めの漢方に持ち込めるように全身状態の改善を図ります。

なるべく早く「攻めの漢方」に転じたくても、がんが進行して体力が落ちているとなかなかそこまで持っていくことが困難なこともあります。

そのような場合は守る漢方で、生活の質を最大限に高めることが目標になります。

がんを克服しようと思ったら、がんがまだ小さく、体力があるうちに漢方治療を開始することが最善の方法なのです。

どんな段階でも日々の生活を大切に

免疫を上げるためにできることは、漢方薬を飲むことだけでなく、日々の生活を見直すことが最も重要です。規則正しい生活リズム、睡眠、食事に気を付けることは何よりも大切な漢方の「養生」です。食事は特にたんぱく質をしっかり摂るように指導しています。がんの食事療法はネットで調べると山ほどあります。すべてを鵜呑みにしないで、個人個人違う、ということに気を付けてください。例えば体重がどんどん減っているのに、野菜ジュースばかりでたんぱく質を摂らないと、さらにやせてリンパ球数も減って、免疫が落ちます。また、漢方では、からだを温めることの重要性を強調します。体温が上がるとがん細胞の増殖速度が落ちますし、免疫も増強します。寒さ対策をしっかりして、温かい食べ物で体温を上げることはとても重要なのです。

渡辺賢治（わたなべ けんじ）

慶應義塾大学医学部卒。慶應義塾大学医学部内科、東海大学医学部免疫学教室に国内留学後、米国スタンフォード大学遺伝学教室に留学。帰国後北里研究所（現北里大学）東洋医学総合研究所、慶應義塾大学医学部漢方医学センター長、慶應義塾大学環境情報学部教授を経て、1931年に開設された漢方専門医院、修琴堂大塚医院院長に就任。横浜薬科大学学長補佐・特別招聘教授、奈良県顧問、神奈川県顧問、漢方産業化推進研究会代表理事、日本臨床漢方医会副理事長、WHO医学科学諮問委員、WHO伝統医学分類委員会共同議長等を兼ねる。1900年以来、西洋医学のみだった国際疾病分類の、第11改訂（2019年）に、伝統医療が初めて取り入れられたが、2005年からプロジェクトの共同議長として長年尽力。主な著書に『漢方医学　同病異治の哲学』（講談社学術文庫）、『未病図鑑』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）、『漢方で感染症からカラダを守る』（ブックマン社）など。